

---

# 100人による生き残りをかけた殺人ゲーム

ゆで卵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

100人による生き残りをかけた殺人ゲーム

### 【NZコード】

N7735Y

### 【作者名】

ゆで卵

### 【あらすじ】

とある島に100人の人間が集められた。その100人に告げられたのは殺人ゲーム。最初は、それを信じられないが、科学では証明できないことが起こり、実際に人が死んでしまう。そこから、人間達は生き残るために他人を殺すことに決めた。この命をかけたゲームに歡喜する者、恐怖する者、絶望する者、たくさんの人間が織り成す殺人ゲームの行く末は……。

# 第1話 殺人ゲームの始まり

「んつ」

地面で寝ていた少年は目を覚ました。

ふにありよく寝た

少年は体を持ち上げて両手を頭の上に伸ばして背伸びをした。  
伸びを終えた少年は周囲を見てある事に気がついた。

「アーティラリーダー？」

少年は自分がどこにいるのかわからなかつた。

（昨日は部活をした後、疲れたから寄り道をしない家に帰つて、そのまま直ぐベッドに入つたよな。服装は学生服のままだし。なのにどうしてこんな森の中にいるんだ……）

少年は本当に自分がどこにいるのか、そして、どうしてこんな森の中にはいるのかわからないようだった。周囲を見渡してもあるのは草木だけ。人の気配がまったくしない。

（もしかして、夢遊病つてやつか？ 寝ている間に自分で気づかずこんな見知らぬ場所に来ちゃったとか……）

「いやいや、それは無い。俺が住んでたのは確かに田舎だったが、こんな森は近くになかった。」

少年は自分が考えた事を首を横に振りながら否定した。

(やうすると、理由がまったく想像つかないんだが……)

少年が頭の中で考えを巡らせていると

『起きたようだね。風間小太郎君。』

「な、なんだつ！？」

突如、男の声で自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。しかし、周囲を見るが誰もいなかつた。もしもの為、周囲の気配を探つたがやはり人の気配はしなかつた。

『ほお～。普通の高校生が周囲の気配を探るなんて驚きだね。いや、でも君は普通の高校生じゃないか。なんたつて君は忍びの血をひいてるのだから』

「な　　つ！？」

小太郎はその内容に驚きを隠せなかつた。彼が忍びの血をひいてるのは父親以外にはいないのだから。では、これは父親によるいたずらなのか。少し考えて違うと判断した。厳格な父親がいたずらをするはずがない。では、これはいたずらではなく、忍びの修行なのか。そう考えていると

『これは、君の父親はまったく関わっていないからね。君の父親だけじゃない、君に関わりを持つ人間誰一人関わっていないから。』

「　　んつ！？」

小太郎は心を読まれたことに衝撃を受けた。自分が今までやつてきた修行は意味が無かつたのではないかと自分自身に問いかけた。

だが、すぐにやめた。こんな事をしても意味がないと悟ったから。今やるべき事はただ一つ

「おまえは何を知ってるんだ？？」

情報収集だ。

『何でも知ってるよ。君がどんな人間で。君の家族がどんな人間か。君が忍びの修行で何をやつてきたか。どんな事でもね。』

小太郎の顔には一筋の汗が流れていた。もしかしたら、こいつはあの事を知っているのかもしれない。あの事はあまり気にしてはないが、周囲にばれると結構まずい事になってしまつ。

『心配しなくてもいいよ。別に君が今考えているあの事について誰かに話そなんて思つていなか。母親殺しの小太郎君。』

「…………」

『おつと、話してしまつたよ。あ、でも、今のは君に話しただけだからノーカンだよね。』

「何が目的だ……」

『あつ、そんな怒らないでよ。別に小太郎君とけんかしたいわけじゃないんだ。』

「…………」

小太郎は男の声の持ち主が今どこにいるかわからないが、とにかく睨みつけることにした。

『ま、無駄話はこいら辺にしといて、本題に入りますか。まず、君をここにさりつたのは私だから。』

男の声はやうりつと悪氣なしに言った。

「なつー?」

小太郎は驚いたがそんな事は構いなし。男の声は話を続けた。

『で、実を言うとやうりつたのは君以外に99人。つまり君を入れて100人ピッタシと言う事だ。君たちをやうりつた理由は君たちにやつてもらいたいゲームがあるんだ。』

「ゲーーーーム……?」

『ああ、ゲームだ。簡単なゲームだ。この空島にいる100人のプレイヤー同士で殺し合いをするゲームだ。簡単だろ。』

「な……につー?」

男の言つた事が一瞬理解できなかつたがすぐに理解した。が、理解しても到底受け入れる事が出来なかつた。

(「こいつ狂つてるのか。さらつといて、いきなり殺し合いをしろなんて出来るはずがない。そもそも、空島つて何だ? ゲームか何かと勘違いしてるんじゃないのか?」)

『で、殺し合いの為の武器は拳銃や剣。では、ないからね。君たちが人を殺すために使う道具。それは……魔法だつ!……!……!……!』

『!……!』

(魔法!? やつぱりこいつ、頭がいかれてやがる。現実と妄想がぐつちやになつた奴か。だが、そう言つ奴ほど何をやるかわからないものだ……)

『魔法を発動するには手の甲に刻まれている文字を声に出して読むだけ。簡単だ。一応言つとくが、この島に残つてゐる人間が3人になるまで家に帰ることはできない。つまり、3人しか生き残る事が出来ないんだ。そのところは、しつかりと心に刻み込んで置いてくれよ。では、説明はこれで終了にする。小太郎君。検討を祈る。』

「おいつ！　ふざけるのも。いい加減にしろ。殺し合いをしろだと……、そんなこと誰がするかっ！！　何かいよつ！』

小太郎がそう叫ぶが男の返事はなかつた。どうやら、もひ、何も言つつもりはないらしい。小太郎はその事を悟りこれからどうするか考え、とにかく歩くことにした。他に人がいるかもしれない。

『ようやく始まりましたね』

先ほどの男の声を発していた男性が椅子に座りながらワインを片手に壁に映し出された島の映像を見ていた。

『今回はどのくらいの額になるのか楽しみですね』

男性はそう言いながらワインに口をつけ、少しだけ飲んだ。壁に映し出された島の映像には小太郎の姿が映つていた。よく見ると、島の映像を映している機械は存在しなかつた。もちろん、壁にテレビの類は存在しない……

小太郎は森の中をさまよつていた。どこまで歩いても同じ光景が続いており、どのくらい歩いたかわからなくなつていった。もう5km歩いたかもしれない。実は500mしか歩いていないかもしれない。小太郎の心は少しずつ追いつめられていた。忍びの修行をしているとは言つても、まだ16歳なのだから。それに、今の時代の修行は戦国時代などの修行などとは比較できないほど楽なものだ。なぜなら、修行の最中に死ぬ事がないのだから。このときほど、小太郎は死の恐怖を味わう修行をしとけばよかつたと思つたことはなかつた。

色々考えながら歩いているついに小太郎は森を出来る事が出来た。若干の喜びを感じたがそれはすぐに絶望へと変わつた。それは、森を抜けた先のとある光景を見てしまつたからだ。その光景とは……

「大地がない……」

そう、大地が無かつたのだ。大地が無いなら何があるのか。それは大空だつた。見渡す限り空・空・空。下を見てもやはり空。雲はまったくなく、もの凄く見通しがいいのに遠くに見えるのもやはり空。大地など、自分が通つてきた方向以外に存在していなかつた。このとき、ようやく男の言つた事が荒唐無稽な話ではない事を理解した。

(「Jの島が空に浮いてるなんて……）

小太郎は自分の右手の甲を見た。そこには影と刻まれていた。

(もし、俺が影と唱えて何か起こつたら男の話が嘘でなくなるといふことだ……)

小太郎の額に汗がにじみ出ていた。

ゴクッ

小太郎の喉を鳴らす音が響いた。そして、小太郎が文字を唱えようとした瞬間。

「火！」  
「ファイア！」

小太郎の真横に突然火が現れた。

## 第2話 最初の犠牲者そして報酬

「火！」<sup>ファイア</sup>

突如、小太郎の真横に火<sup>火</sup>が出現した。いや、正確には違つた。小太郎の後方から飛んできたのだ。

「なつ！？」

小太郎は火の出現に驚きのあまり倒れ込んでしまった。

「あ～。はずしちゃったか。なかなか当たらないものだな。」

森の中から一人の男の子が頭に手を当てながら現れた。信じられないが言動からこの火を出したのはこの男の子のようだ。

「よ～し。次は当てるぞ。」

男の子はそう言つて小太郎に手をかざした。小太郎は男の子が何をしようとしているのかわからなかつたが、手を見るともの凄い寒気を感じ咄嗟に横に跳んだ。

「火！」<sup>ファイア</sup>

小太郎が横に跳んだ次の瞬間、小太郎がいた場所に男の子の手から突如、出現した火の球が命中した。

「そつか。相手が避ける事も考えないといけないのか。」

男の子は笑っていた。この状況を楽しんでいたようだつた。この光景を茫然と見ていた。目の前でありえない光景が繰り広げられたのだからしようがない。しかし、小太郎の頭の中にこの場所に来て最初聞いた男の声を思い出した。

（『君たちが人を殺すために使う道具。それは…… 魔法だつ……！……！』）

その言葉を思い出し小太郎は自我を取り戻した。

（あ、あの言葉は本当だつたのか……）

そういひしているうちに男の子は小太郎に手をかざしていた。

「今度こそ当てるからねー。」

「なつ……」

「火……」

小太郎は無我夢中に跳んだ。そのおかげで避けることに成功したが……

「火……」

男の子は小太郎の着地地点に向かつて魔法を発動した。小太郎は慌てて着地したため態勢が完全に崩れていた。

（よ、避けられない！？ こんなどこで死ぬのか！？ 僕はこんなどこで死ぬのか！？ 嫌だ死にたくない……）

「死にたくないつ！ 影オ…………」

男の子から発せられた火の球は小太郎に直撃した。

「ハハハッ。やつたぜ。命中したー。このゲーム最高だ。ファンタジーの世界みたいに魔法を使えるし、その力を使って好きなだけ人を殺していいんだから。」

男の子が高笑いをあげていると、小太郎がいた場所がかすかに動いた。

「…………ん？？」

男の子もその事に気づき燃えている場所を見ていると、黒いものが火を一瞬にして消すのが見えた。そして、火が消えた場所には無傷の小太郎が立っていた。

「なっ！？ ど、どうして生きてるんだ……」

男の子はその光景を見て驚いていた。

「魔法を使えるのはお前だけじゃないのを忘れたのか？」

小太郎がそう言つと男の子は気がついた。小太郎があの一瞬に魔法を発動させたのだと……

「そ、そうだったな…… 魔法が使えた喜びで忘れてたよ。まあ、せつかく生き残つたところ悪いんだけど……」

男の子は手をかざして

「死んでくれないかなっ！！ 火つ！！」

男の子の手から火の球が出現し、小太郎めがけて飛んだ。

「もう、お前の攻撃は効かない。影。<sup>シャドー</sup><sup>ファイア</sup>」

小太郎がそういうと小太郎の影が突然動き出し飛んでくる火の球の前に移動しぶつかった。直後、影は火の球を地面にたたきつけ消化した。

「なっ！？」

男の子は驚愕した。当然だ。この攻撃で小太郎を簡単に殺せると考えていたのだ。それを、ハ工を手ではらうような簡単な動作で防がれたのだ。驚かずにはいられるはずがない。

「く、くそっ！！ 火つ！！<sup>ファイア</sup>

今の光景が信じられないのか、男の子は小太郎めがけて魔法を発動した。しかし、それも小太郎の魔法にことごとく防がれてしまう。

「なぜだっ！？ どうして防がれるんだ。俺の魔法が弱いっての言うのかつ。ふざけるな、ゲームならちゃんと平等にしやがれっ！！」「お前の魔法が弱い訳じやない。おまえの使い方が悪いだけだ。」

小太郎の言葉に完全に頭にきた男の子は雄たけびをあげながら魔法を無我夢中に発動する。小太郎は自分に当たる魔法だけを見極め、そして、影を操って防いでいた。小太郎の後ろは火の海となつていたが、小太郎の周囲には火が存在しなかつた。

「く、くそおおお。」

男の子は小太郎に殴りかかった。魔法が効かないなら殴り殺せばいいと考えたらしい。完全に頭に血がのぼっていたらしくまともな考えを持てなかつたようだ。しかし、殴り合いでも小太郎に分がつた。小太郎は忍びの修行を今までしてきたのだから。その結果、簡単に男の子を殴り飛ばすことに成功した。男の子は森ではなく、空が延々と続いている崖の方に投げ飛ばされた。小太郎はこの後すぐこの事を後悔することになる。

「う、うぐう……」

男の子はおなかを抱えながらもだえていた。おなかにくらつた拳がもの凄く痛かつたらしい。小太郎の事を憎しみのこもつた目で睨みつけた。

「もう、いいだろう。とにかく、殺し合いなんかやめて話しあおう。」

「ふ、  
ファイア  
火つ！…」

男の子が魔法を発動した。しかし、火の球は小太郎ではなく、空高く飛んでいった。なぜなら、男の子が火の球が飛んだときの反動に体が耐えられず、後ろに倒れ込んでしまつたからだ。これは、小太郎にとつては運が良かつたことだ。しかし、男の子にとつては最悪の事態だつた。なぜなら、倒れ込んだ先には大地が無かつたからだ。

「へつ！？」

男の子は氣の抜けた声を発した。自分の置かれた状況に頭がついていけないようだ。しかし、それも、自分の目の前に岩壁が見えると今の状況を理解したらしい。

「た、助けて……誰か助けてえ————！」

男の子は大粒の涙を流しながら腕を脚を振り回した。落ちるのに必死になつて抵抗しているのが手に取るようになつた。

それに対しても小太郎は目の前で落ちそうになつている男の子に対して手を必死になつて伸ばした。

（と、届け——！）

その健闘むなしく小太郎の手は男の子を掴む事なく空を切つたのだ。「駄目か」と思った小太郎だが、ある事をひらめいた。

（これなら、この子を助けられる）

「影——！」  
〔シャドー〕

小太郎は魔法を使って男の子を助けようとした。男の子は自分に向かつて飛んできた影を掴もうと必死に手を伸ばした。助かりたい一心で。そして、影が男の子に追いつきそれを掴もうとした。

しかし、ここで予期せぬ事態が起つた。もし、小太郎がこの魔法をはやくに発動して練習していたら、こんな事態は起らなかつただろうに……

男の子が影を掴んだ瞬間、男の子の手は真つ二つに分かれてしま

つた。そして、影はそのまま男の子を貫いたのだった。そして、影は男の子を空島に引つ張り上げた。確かに男の子がこの空島から落ちなかつた。しかし、その代わりに命を落としてしまつた。

「なつ！？…………」

小太郎は理解した自分がこの男の子を殺してしまつたことに……  
「そ、そんな……俺は助けよつとしたのに。」

小太郎は男の子の死体を見てつぶやいた。小太郎は男の子が自分をじつと見ているように思えて急いでこの場を立ち去つた。この場にいる事に耐えられなかつたみたいだ。

小太郎は息を切らしながら森の中を走り続けた。一刻も早く、あの場から離れたかったのだ。そして、走り続けると大きな木を見つけ、そこに人が隠れられるような穴を見つけた。小太郎はそこに飛び込んだ。もしかしたら、さつきの男の子が生き返つて自分の事を追いかけているかもしれないと考えるといてもたつてもいられなかつた。小太郎は頭を掴みながら震えていた。

(どうして。どうしてこんなことになるんだつ！…)

小太郎は思つてゐる事を口に出せなかつた。声に出したら見つかるかもしれないと思つてしまつたからだ。実際のところ、男の子の死体はあの崖に置き去りにされたまま動いていながら。

『皆さま。ただ今、一人のプレイヤーが他プレイヤーに殺されました。残り99人となりました。』

「…………ツ！？」

その言葉を聞き小太郎は身を固くした。

『そこで、プレイヤーが99人になつたことで参加者の皆様にこのゲームの報酬についてお話したいと思います。』

空島に散らばっていたプレイヤーがこの言葉に耳を傾けた。

『このゲームの報酬……。それは、クリアしたプレイヤーの願いを一つだけ叶える事です』

「…………」

プレイヤーがその言葉に驚きを隠せなかつた。しかし、今の小太郎にはそんな事どうでもよかつた。

小太郎は昔の頃を思い出した。

あの日は雨が降つていた……

「お母さんっ。」

10歳の小太郎は母親に抱きついた。その顔はもの凄く嬉しそうだつた。

「な、に、小太郎？」

小太郎の母親は小太郎の事を優しく包み込むような笑顔を浮かべ

小太郎に返事をした。

「うんとね。僕ね、この前、お父さんに教えてもらつた技がね出来るようになったの。見てて。」

小太郎は笑顔を見せながら言った。母親に自分の凄いところを見て褒めてもらいたい一心だった。しかし、大失敗してしまった。失敗したつけは母親が払つたのだ。この時、小太郎の母親が死んだ。小太郎の事を庇つて……

今更だ……あの日俺は母さんを殺したんだ……

小太郎が母親を殺した日を思い出していた。

『願い事はどんな事をでも叶える事ができます。お金が欲しいなら、一生困らないお金を。女性が欲しいなら、あなたの理想な女性を。国が欲しいなら、どこかの国の王に。』

『そして、誰かを生き返らせたいのなら、一人だけ生き返らせよ。』

「…………ツ！？」

その言葉を聞いた小太郎は驚いた。

『ただし、叶えられるのはこのゲームで生き残つた人だけ。皆様の『健闘を期待します。』

プレイヤー達はこの言葉を聞いて完全に目の色を変えた。もちろん、小太郎もその一人だった。

（このゲームに生き残ればまた母さんに会える……）

小太郎は落ち着きを取り戻した。その顔つきは完全に人殺しの顔  
だった……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7735y/>

100人による生き残りをかけた殺人ゲーム

2011年11月23日14時52分発行